施工者に幸あれ 第43回

疾風のごとく RIA 近藤正一

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco◉Switch・エンタテインメント

■マラソンコースを

近藤正一氏は，田園調布から電車で毎日通勤する現役の名誉会長です。一日7，8千歩を歩く1930年生まれの建築家・近藤正一は，RIA発足時すぐに入所して現在に至る人。建築家・山口文象が，一人の建築家とそれを支えるスタッフたち，というあり方ではなく，複数の建築家が集団で設計に取り組むフラットな組織を構想した（RIA住宅の会編／磯達雄『疾風のごとく駆け抜けたRIAの住宅づくり』彰国社）のがその組織。対等な立場で組んだうちの一人が，若手建築家の近藤正一だったわけです。ほかに，建築家の植田一豊，三輪正弘などがいた。

渋谷駅前のQ-FRONTビル，天王洲アイルの都市開発，二子玉川の再開発等々，あれもそうだったのか，と思う仕事をしているRIA（磯達雄）。つい最近，JR成田駅東口の再開発事業の設計に携わった所員，佐伯美奈子氏のお声掛かりで見学したばかり。「最終的には建築が主体だが，建物単体ではなく，街づくり」との近藤氏の説明で，理解が深まる。街が変わり，成田山の参詣者も増えそうです。

自らを，RIAというマラソンコースを走る，あるときはトップランナー，あるときは伴走者，ペースメーカーのときもあったと例える。「今は，応援団か解説者かもしれない」。巧いことおっしゃいます。

■声優から建築へ

20年程前に，軽井沢でお目に掛かって以来，時々ご挨拶してきた。いつも変わらないご立派な風貌に目がいき，気がつかなかったことがある。初めて電話を介しての声が，驚くばかりに若々しく深みがあるのです。「実はね，声優だった……」とおっしゃいます。終戦のころ東宝小劇場に所属していたというから，本格的声優さんだったのだ。さらに，猪熊弦一郎画伯が師匠だったというから，絵も本格的。さまざまな才能に恵まれた近藤氏は，早稲田大学で学んだが，東京芸大の榮久庵憲司氏（工業デザイナー）とは，デザインを通しての親交がずっと続いていたという。飛行機の設計・**空**がしたい，駆逐艦の設計・**水**がしたいと，憧れているうちに時代が変わり，レイモンド・ローウィの「口紅から機関車まで」が好きになって，建築・**土**の道に入ったそうです。

■刺激を

終戦時は，焼けトタンの屋根のムコウに，海が見える銀座であったという。何もなくなった東京，誰も助けてはくれない。先の見えない，そんなときからスタートして，生きてきた人の言うことは，深い思いが詰まっている。「今の若者たちに言いたいことや，怒りはありますか」と覇志堂が問うと，「ありません，羨ましいと思うばかりです」と思いがけないお答えが返ってきた。「しかしね，ぬるま湯に浸かっているように見えてしまう。もったいないです。ほどほどの刺激を，自分でつくっていくことが必要ではないでしょうか。海外に行って仕事をすることでも何でもよいから……」。怒っても，言ってもしょうがないとの思いのなか，そう語ってくださった。

毎日，スケジュールは埋まっているらしい。積極的に若い建築家の話を聞きに，ちょくちょくキュートな愛妻とお出かけになる。「次に生まれてきたときは，もう建築はしませんよ」と言いながら次なる刺激を求める！

日本を引っ張ってこられた同年代の方が，同じ話を繰り返すのを聞くことがある。これが年齢というものか，自分も気を付けたいと思う。休肝日なしで食事に合わせたお酒は今も日本酒なら2合。なんて，ゆとりの笑顔が似合うオトナなのだろう。